アジアの伝統芸能　第一回

なぜアジアの伝統芸能を学ぶのか

狂言「附子」を例に

外国の人から「日本独自の伝統文化にはどのようなものがありますか？」とたずねられたら、あなたは何と答えますか？

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization · Intangible Cultural Heritage

Intangible cultural heritage

Connection

EN FR ES

Search ICH website

Webpages, elements, decisions...

NEWS EVENTS CONVENTION LISTS SAFEGUARDING ACTORS BY COUNTRY

UNESCO » Culture » Intangible Heritage » Lists » Nôgaku theatre

Nôgaku theatre

Nomination file

Japan

Inscribed in 2008 (3.COM) on the Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity (originally proclaimed in 2001)

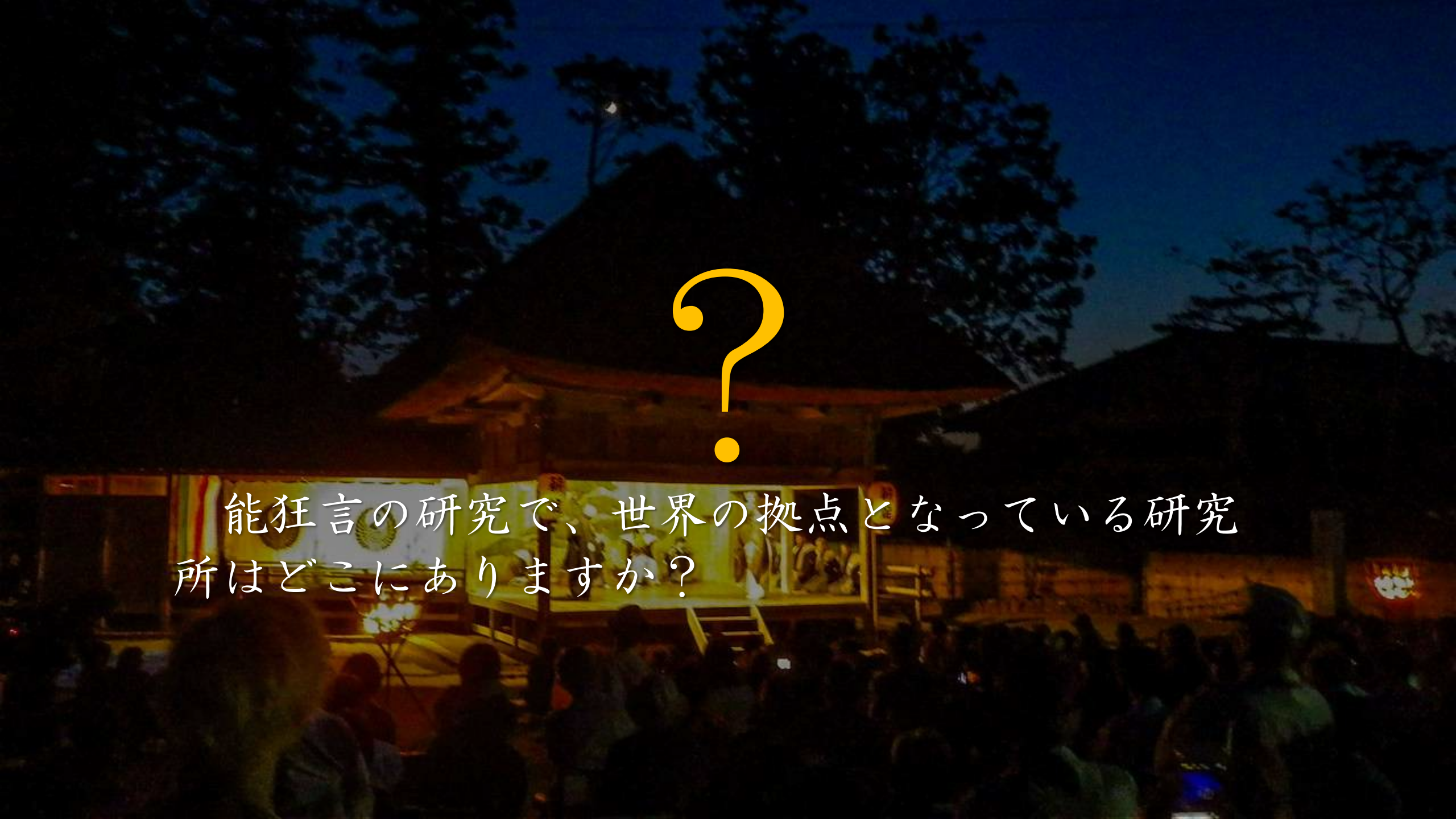
Decision

Inscription: 3.COM

Nôgaku theatre had its heyday in the fourteenth and fifteenth centuries, but actually originated in the 8th century when Sangaku was transmitted from China to Japan. At the time, the term Sangaku referred to various types of performance featuring acrobats, song and dance as well as comic sketches. Its subsequent adaption to Japanese society led to its assimilation of other traditional art forms. Today, Nôgaku is the principal form of Japanese theatre and has influenced the puppet theatre as well as Kabuki. Often based on tales from traditional literature, Nôgaku theatre integrates masks, costumes and various props in a dance-based performance. Moreover, this theatre requires highly trained actors and musicians. Nôgaku encompasses two types of theatre: Noh and Kyôgen, which are performed in the same space. The stage projects into the audience and is linked by a walkway to a "hall of mirrors" backstage. In Noh, emotions are represented by stylised conventional gestures. The hero is often a supernatural being who takes on human form to narrate a story. The distinctive masks for which Noh is renowned are used for the roles of ghosts, women, children and old people. Kyôgen, on the other hand, relies less on the use of masks and is derived from the humorous plays of the Sangaku, as reflected in its comic dialogue. The text is written in ancient language and vividly describes the ordinary people of the twelfth to sixteenth centuries. In 1957 the Japanese Government designated Nôgaku as an Important Intangible Cultural Property, which affords a degree of legal protection to the tradition as well as its most accomplished practitioners. The National Noh Theatre was founded in 1983 and stages regular performances. It also organizes courses to train actors in the leading roles of the Nôgaku.

Reports

2008年、能楽(能・狂言)が文楽、歌舞伎とともに国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産の代表リストに登録された。



？

能狂言の研究で、世界の拠点となっている研究所はどこにありますか？

野上記念法政大学能楽研究所

The Nogami Memorial
Noh Theatre Research Institute of
HOSEI University

日本語 English 法政大学 HOSEI UNIVERSITY

トップ | 概要 | 研究所の活動 | 蔵書・文庫 | デジタルアーカイブ | 利用案内 | 刊行物 | リンク

?

あなたは能狂言を見たことが
ありますか？

外国の人から「日本独自の伝統文化にはどのようなものがありますか？」とたずねられたら、あなたは何と答えるでしょうか。能・狂言、歌舞伎、文楽、講談、落語――名前はいろいろと浮かぶでしょうが、実際に鑑賞したことがあるものはどれくらいあるでしょうか。さらに「その特色は？」と聞かれたら。

この授業では中国の伝統芸能について学ぶとともに、それとの比較を通じて、アジアという大きな視点から日本の伝統芸能の特色について考えていきます。

第一回の今日は狂言「附子」を例に、日本の伝統芸能とアジアとの意外な繋がりについてご紹介します。

狂言「附子」（『狂言絵』より）

狂言

狂言は、今から約六〇〇年前、室町時代に成立した、せりふと仕草で演じられる演劇である。

わが国の古典芸能の中では、唯一の純粋な喜劇であり、二〇〇八年には、能とともにユネスコの無形文化遺産の代表リストに登録された。

狂言「附子」

〔梗概〕

狂言の現行曲(現在も上演されている演目)には、和泉流が二五六曲、大蔵流が二〇〇曲、両者の重複を除き、計二六三曲がある。

その中でもっともよく知られているのが「附子」である。

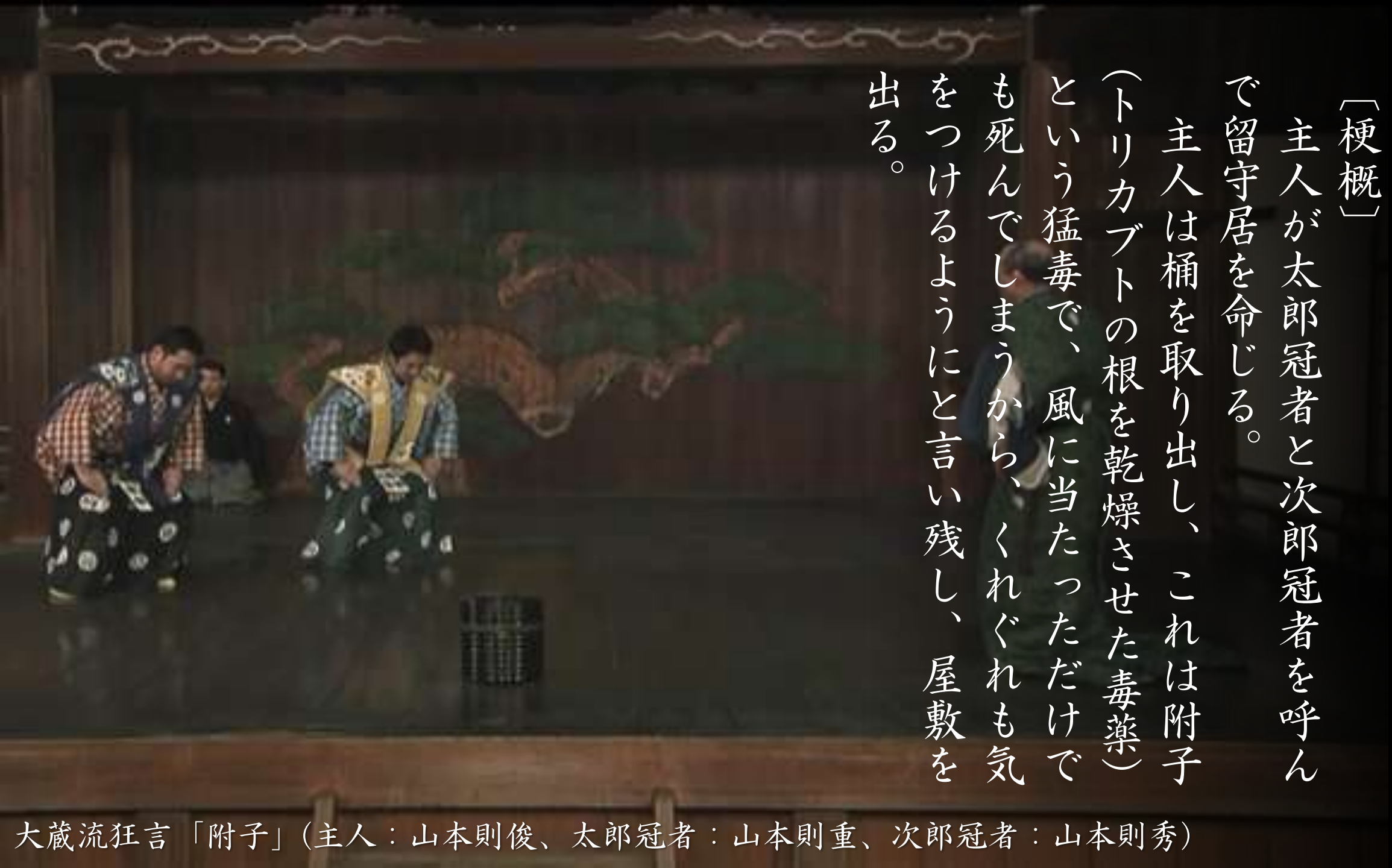
大蔵流狂言「附子」(主人：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)

狂言「附子」

〔梗概〕

主人が太郎冠者と次郎冠者を呼んで留守居を命じる。

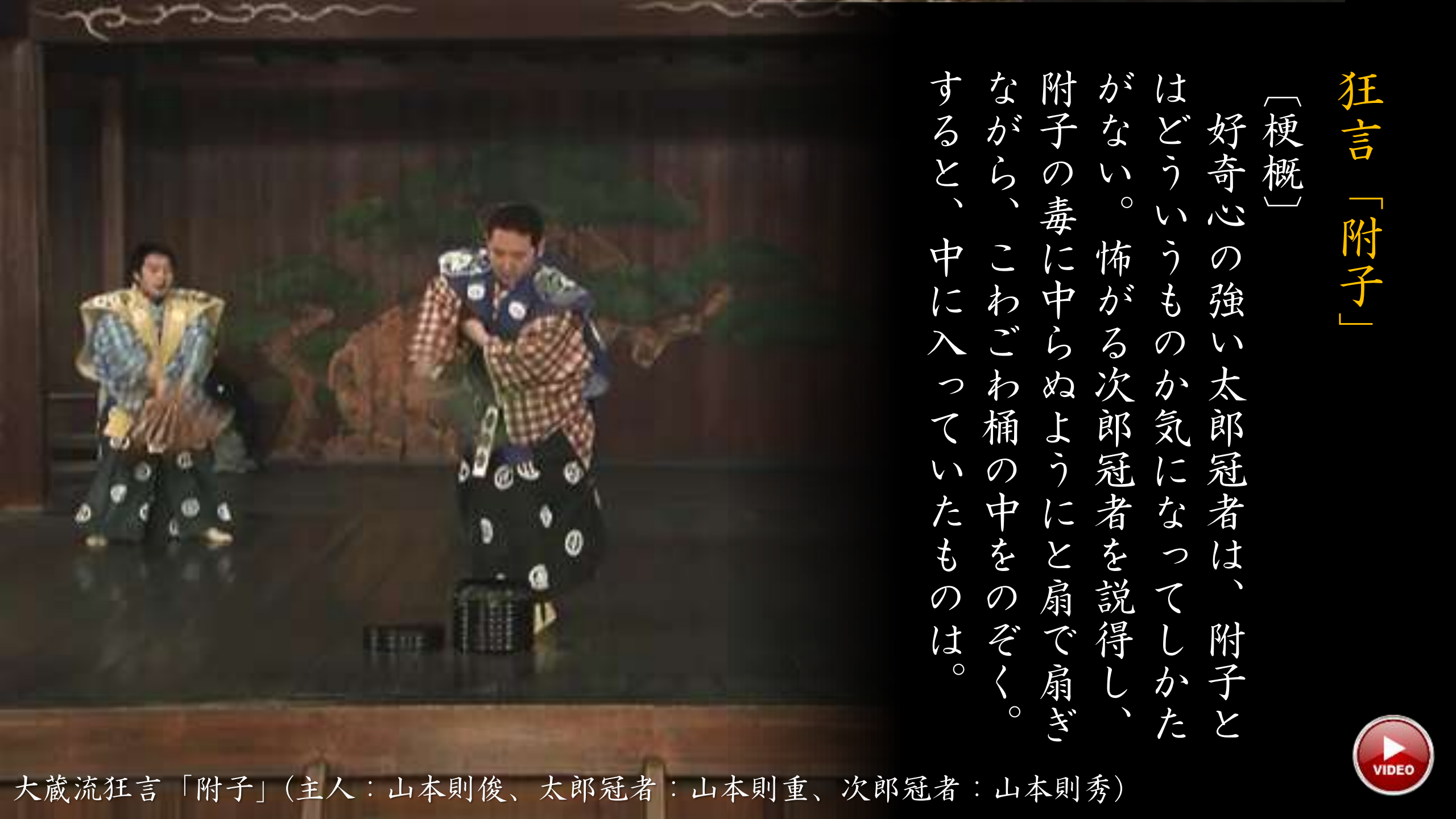
主人は桶を取り出し、これは附子（トリカブトの根を乾燥させた毒薬）という猛毒で、風に当たっただけでも死んでしまうから、くれぐれも気をつけるようにと言い残し、屋敷を出る。



大蔵流狂言「附子」（主人：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）

大蔵流狂言「附子」

（主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）



狂言「附子」

〔梗概〕

好奇心の強い太郎冠者は、附子とはどういうものか気になってしかたがない。怖がる次郎冠者を説得し、附子の毒に中らぬようにと扇で扇ぎながら、こわごわ桶の中をのぞく。すると、中に入っていたものは。

大蔵流狂言「附子」（主人：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）

大蔵流狂言「附子」

（主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）

狂言「附子」

〔梗概〕

桶の中に入っていたのは、意外にも砂糖だった。吝嗇な主人は、二人に砂糖をつまみ食いされないよう嘘をついたのだ。

太郎冠者と次郎冠者は「こんなうまいもの食べたことがない」と砂糖を頬張る。

砂糖を食べる太郎冠者と次郎冠者

狂言「附子」

〔梗概〕

気がつくと桶の中は空っぽ。太郎冠者は、主人が帰ってきたときの言い訳にと、次郎冠者に主人が大切にしている掛軸を破らせ、さらに二人で台天目茶碗を割ってしまう。

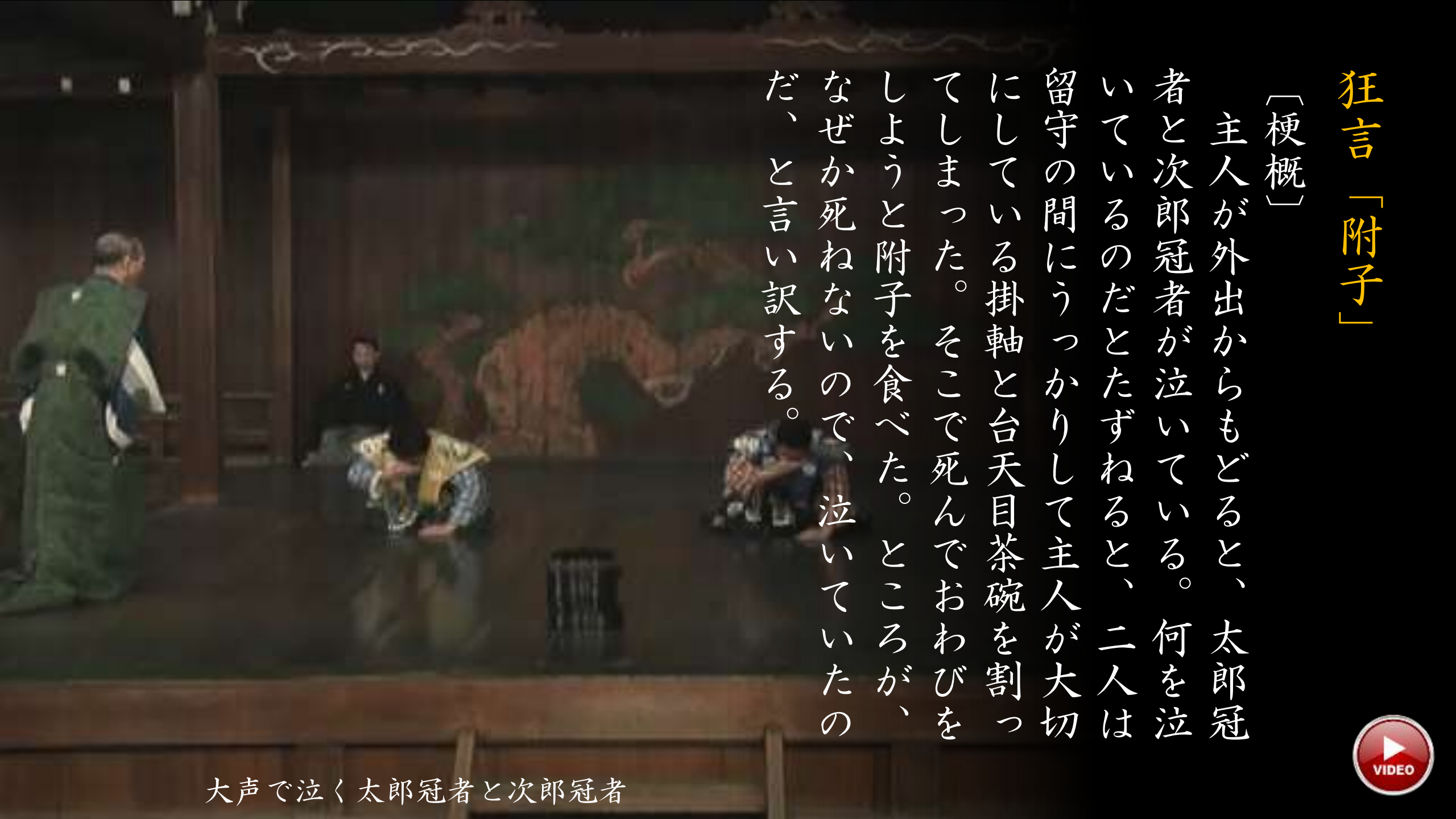
天目茶碗を割る太郎冠者と次郎冠者

大蔵流狂言「附子」
（主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）

狂言「附子」

〔梗概〕

主人が外出からもどると、太郎冠者と次郎冠者が泣いている。何を泣いているのだとたずねると、二人は留守の間にうっかりして主人が大切にしている掛軸と台天目茶碗を割ってしまった。そこで死んでおわびをしようと附子を食べた。ところが、なぜか死ねないので、泣いていたのだ、と言い訳する。



大声で泣く太郎冠者と次郎冠者

大蔵流狂言「附子」
（主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）

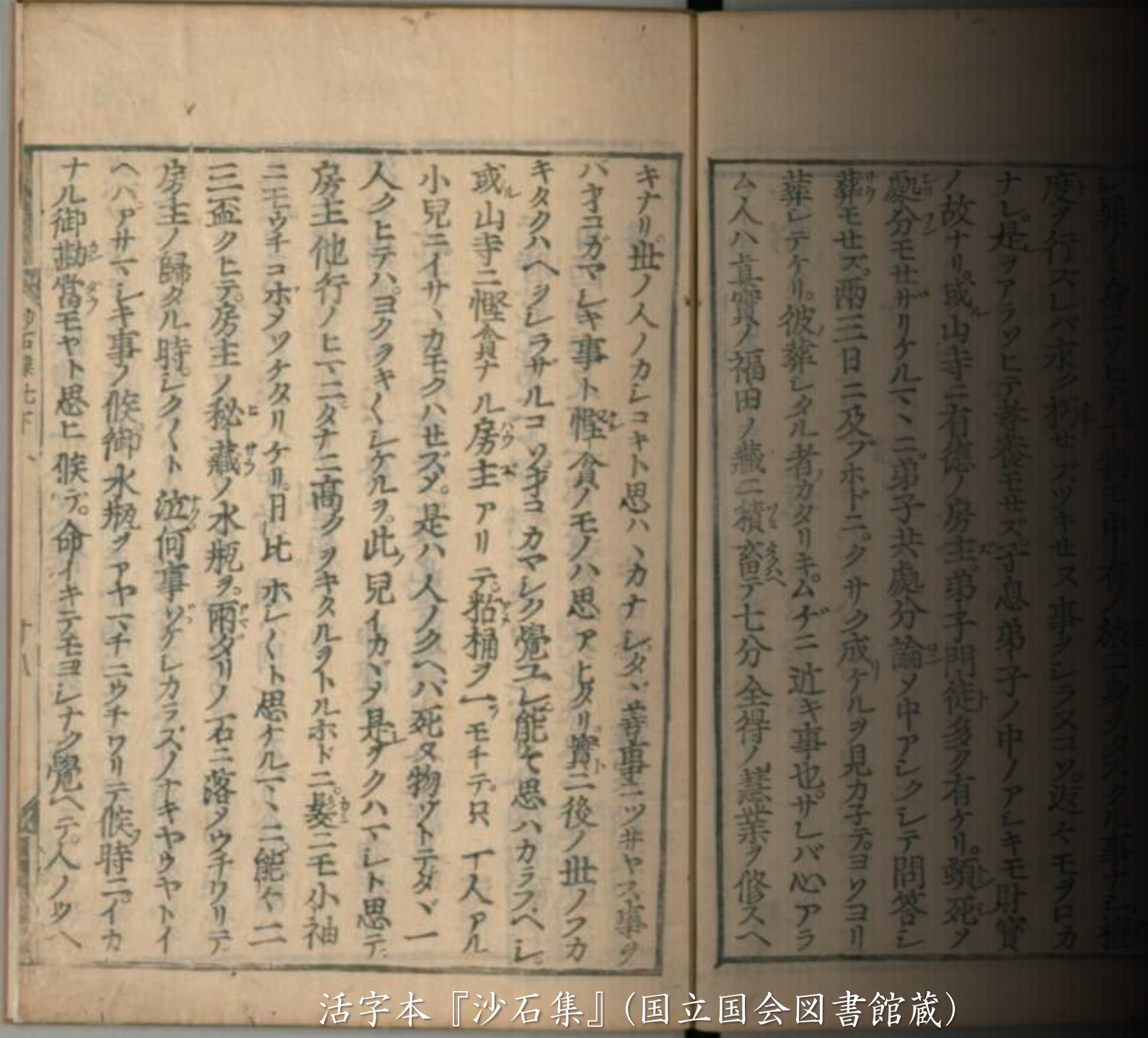
狂言「附子」の歴史

鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』(僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物)の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすさとう（附子砂糖）」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立

（鎌倉時代）無住『沙石集』

巻七下　慳貪者事

ある山寺に慳貪なる房主ありて、飯桶を一つもちて、只一人ある小児にいささかも食はせずして、「これは、人の食へば死ぬ物ぞ」とて、ただ一人食ひてはよく置きおきしける。



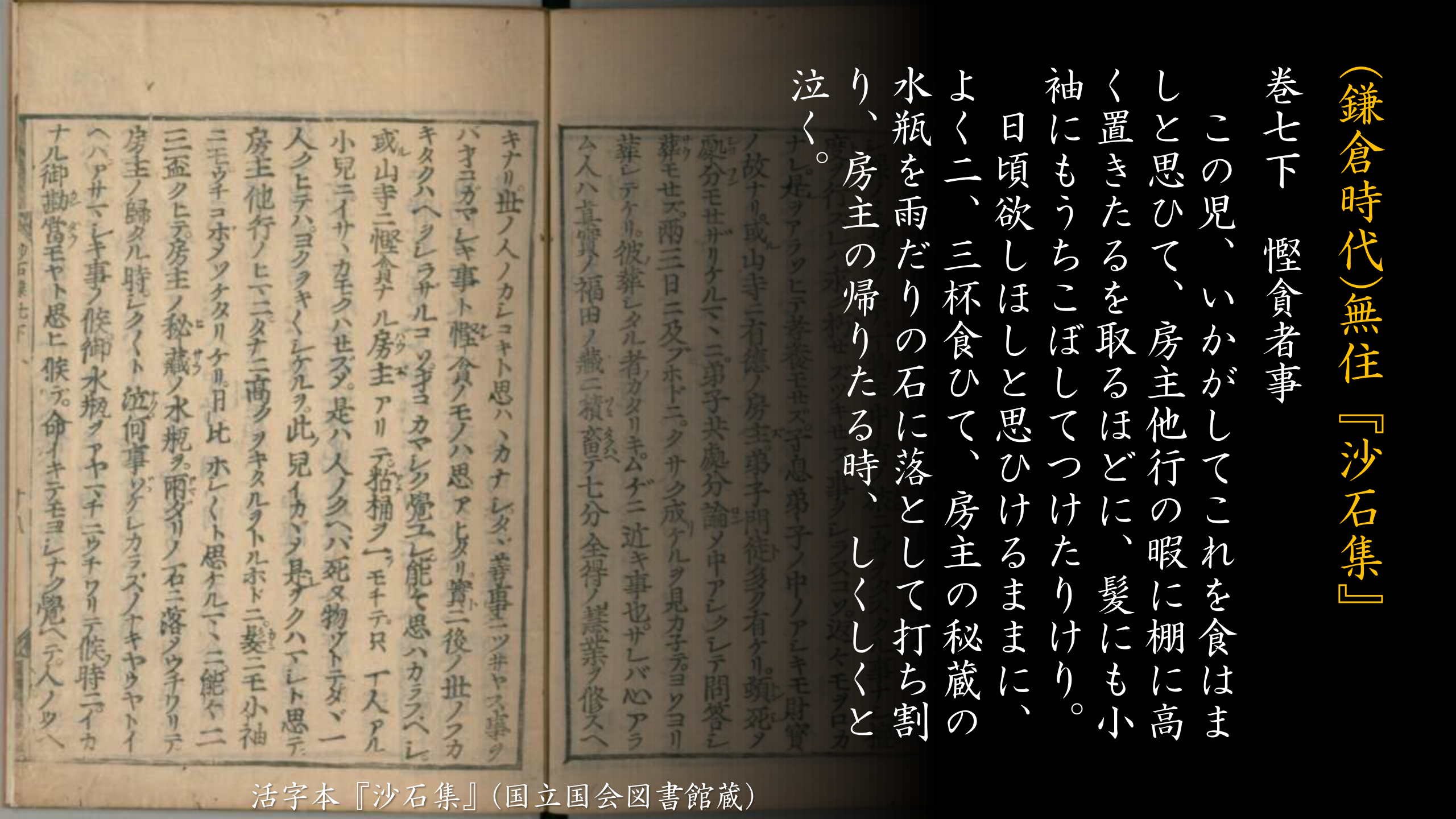
活字本『沙石集』（国立国会図書館蔵）

（鎌倉時代）無住『沙石集』

巻七下　慳貪者事

この児、いかがしてこれを食はましと思ひて、房主他行の暇に棚に高く置きたるを取るほどに、髪にも小袖にもうちこぼしてつけたりけり。

日頃欲しほしと思ひけるままに、よく二、三杯食ひて、房主の秘蔵の水瓶を雨だりの石に落として打ち割り、房主の帰りたる時、しくしくと泣く。



活字本『沙石集』（国立国会図書館蔵）

（鎌倉時代）無住『沙石集』

巻七下　慳貪者事

「何事ぞ、けしからずの泣きやうや」と言へば、

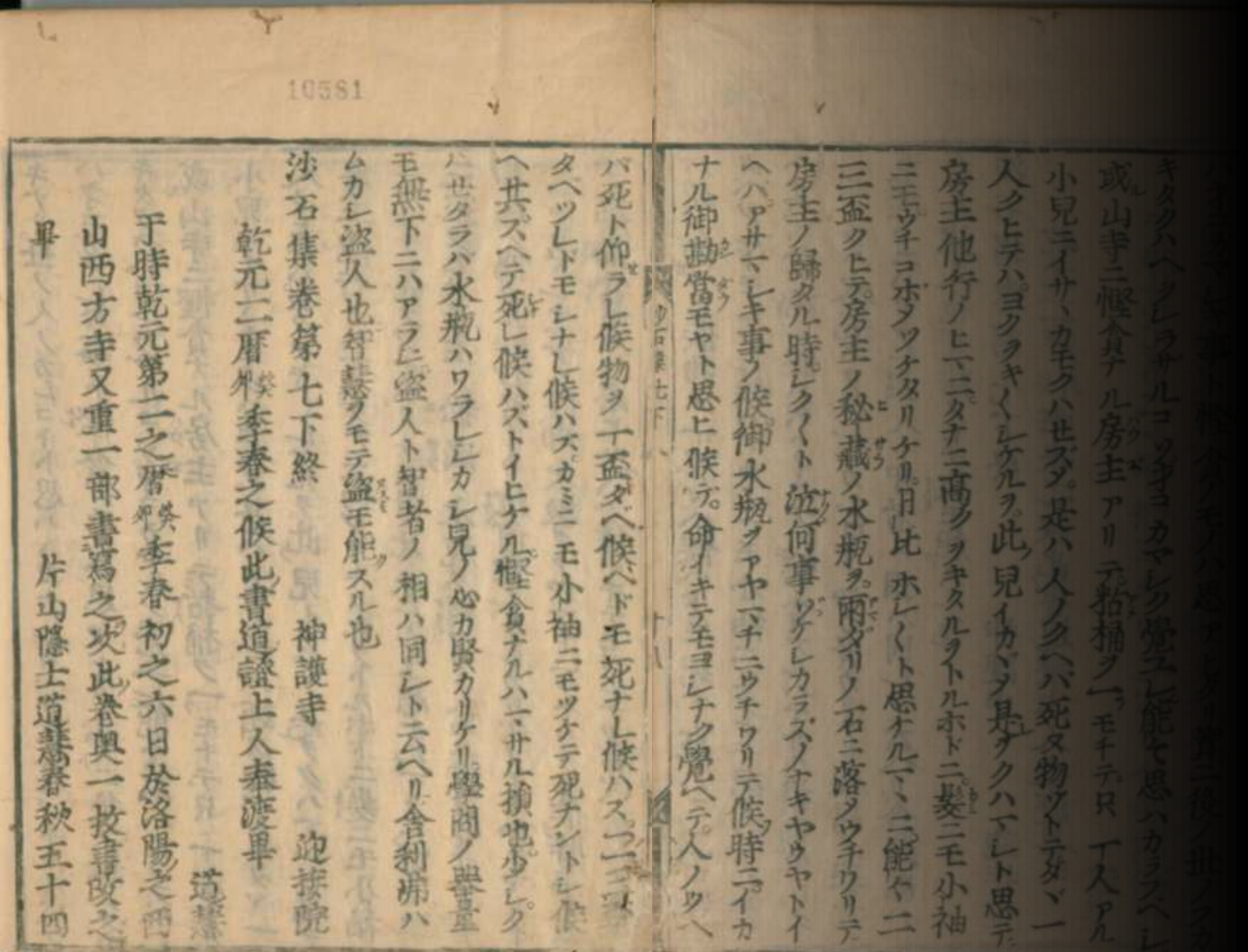
「あさましき事の候。お水瓶をあやまちに打ち割りて候時に、いかなる御勘当もやと思ひ候て、命生きてもよしなく覚へて、人の食へば死ぬと仰られ候物を一盃食べ候へども死なれ候はず、二、三盃食べつれども死なれ候はず、髪にも小袖にもつけて死なんとし候へども死なれ候はず」と言ひける。

活字本『沙石集』（国立国会図書館蔵）

（鎌倉時代）無住『沙石集』

巻七下　慳貪者事

慳貪なるはまさに損なり。少し食はせたらば、水瓶は割られじかし。児の心賢かりけり。学問の器量も無下にはあらじ。



活字本『沙石集』（国立国会図書館蔵）

狂言「附子」の歴史

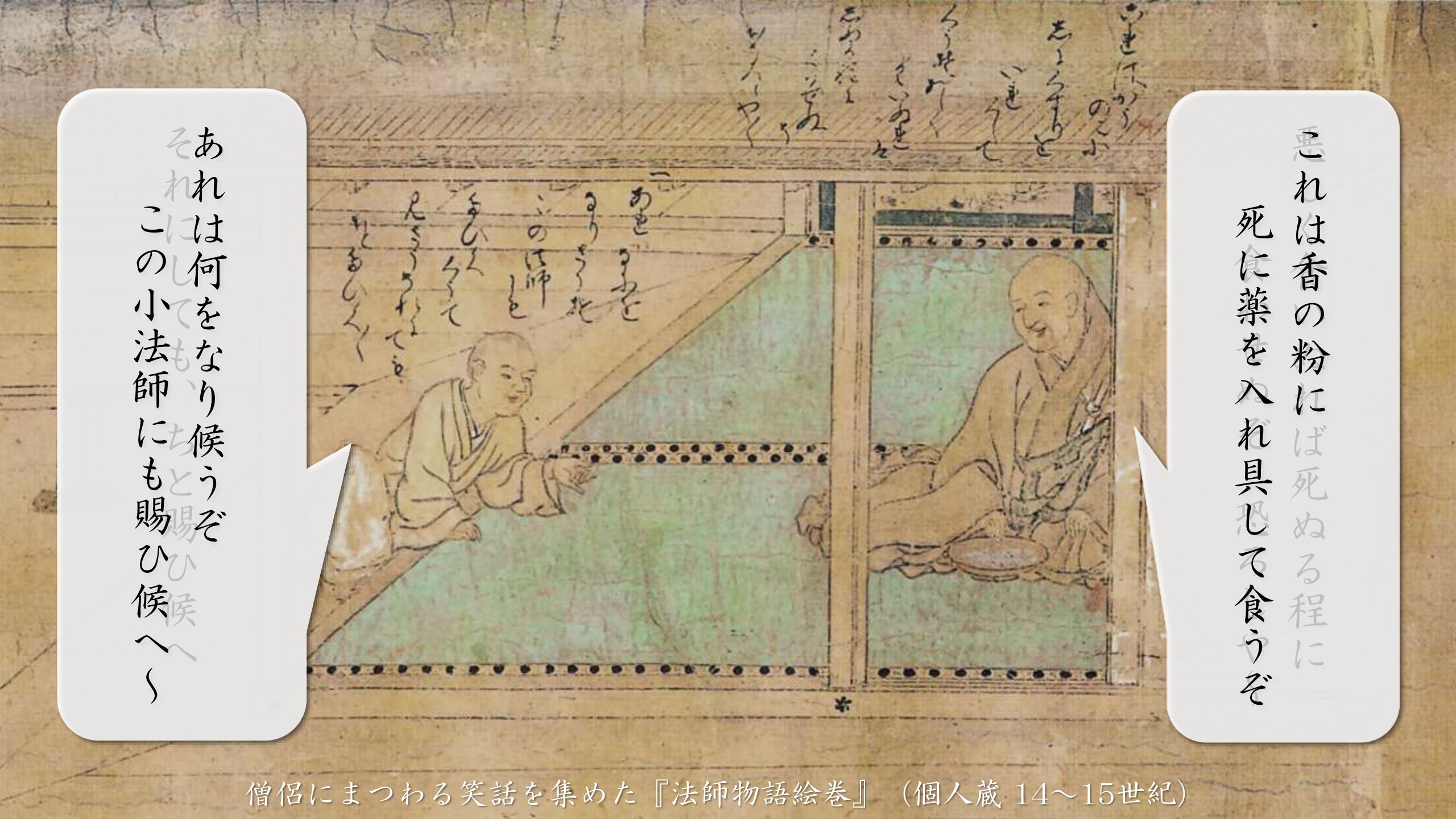
鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』(僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物)の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすさとう（附子砂糖）」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立

僧侶にまつわる笑話を集めた『法師物語絵巻』（個人蔵 14～15世紀）

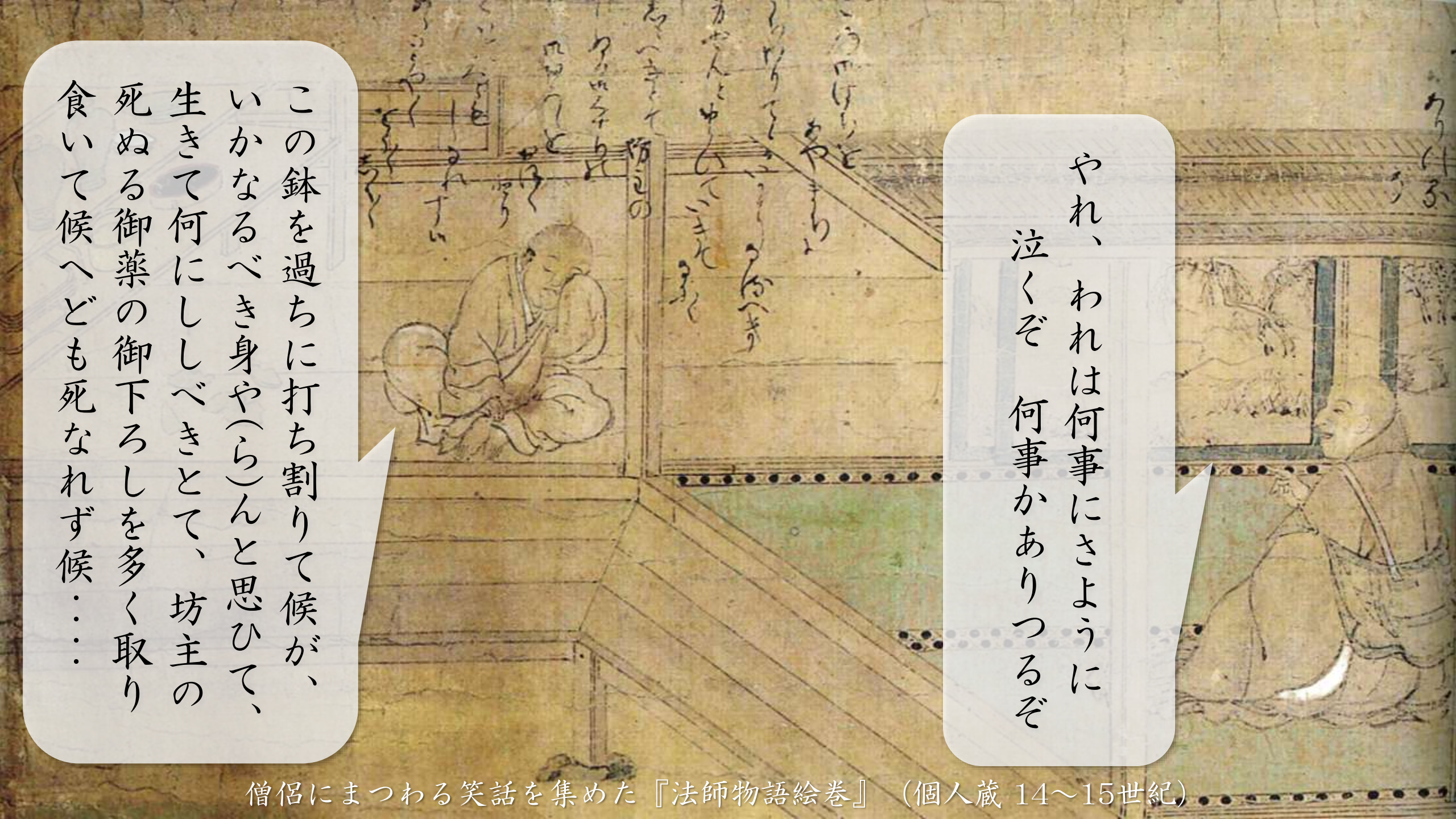
『法師物語絵巻』

このモチーフは僧の貪欲や妄語を風刺する笑話として、絵巻物の題材にもなった。

近年公開された『法師物語絵巻』には、僧と小僧の対話を通じて、この笑話が生き生きと描かれている。



僧侶にまつわる笑話を集めた『法師物語絵巻』（個人蔵 14〜15世紀）



僧侶にまつわる笑話を集めた『法師物語絵巻』（個人蔵 14～15世紀）

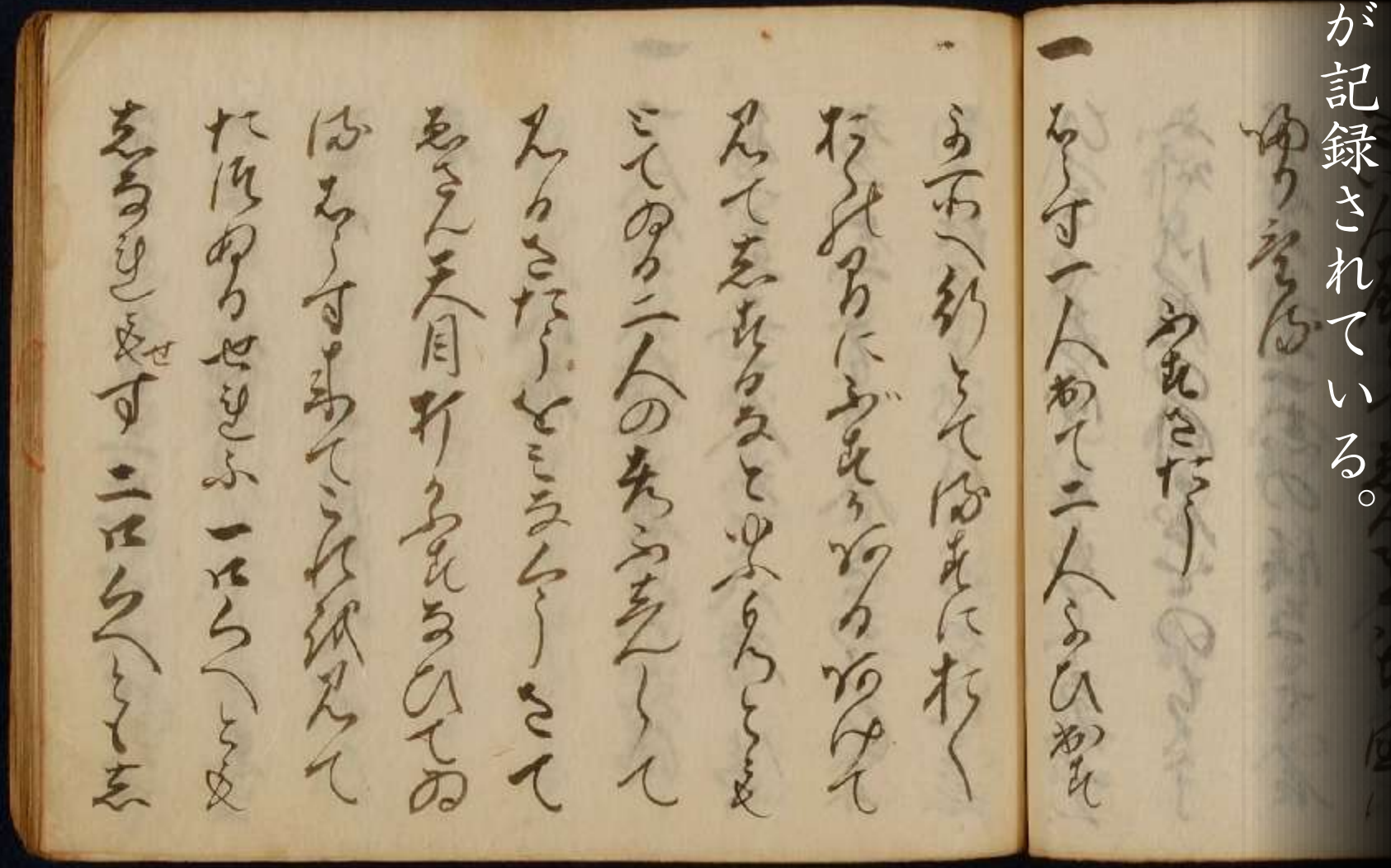
狂言「附子」の歴史

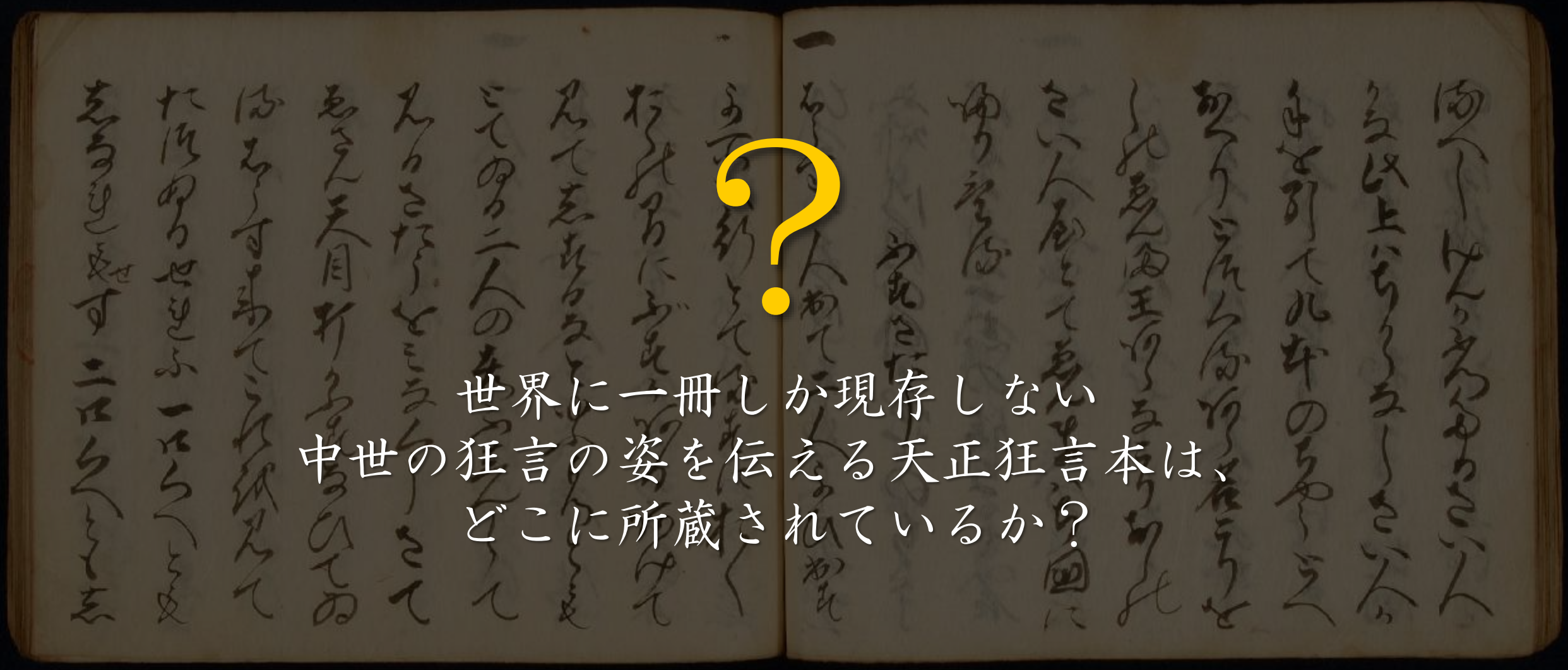
鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』(僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物)の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすさとう（附子砂糖）」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立

天正狂言本

現存する最古の狂言台本。中世の狂言の姿を伝える唯一の台本でもある。

巻末に天正六（一五七八）年の日付があるため、この名で呼ばれる。安土桃山時代の狂言一〇三曲の上演方法が記録されている。





世界に一冊しか現存しない
中世の狂言の姿を伝える天正狂言本は、
どこに所蔵されているか？

野上記念法政大学能楽研究所

The Nogami Memorial
Noh Theatre Research Institute of
HOSEI University

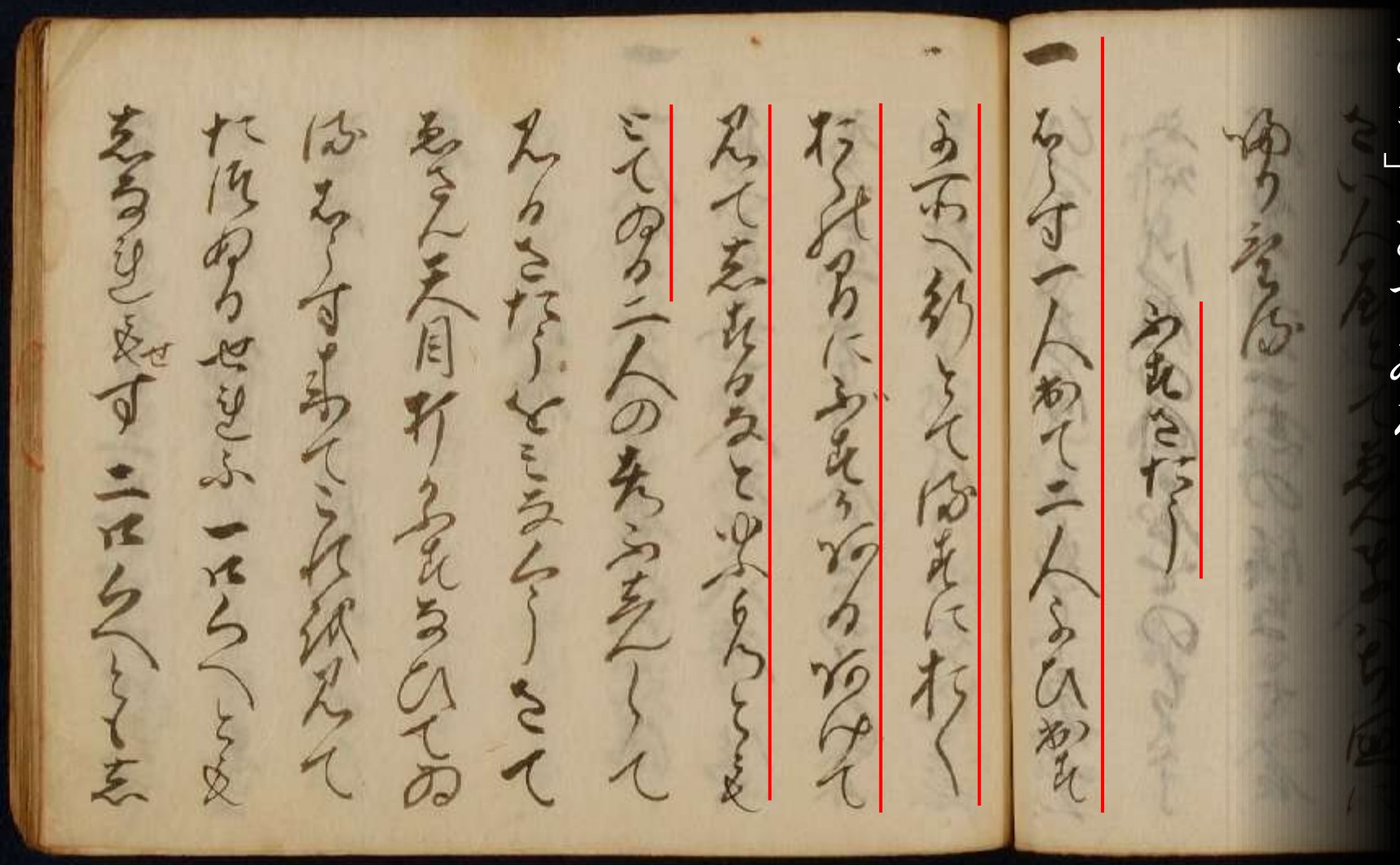
日本語 English 法政大学 HOSEI UNIVERSITY

トップ | 概要 | 研究所の活動 | 蔵書・文庫 | デジタルアーカイブ | 利用案内 | 刊行物 | リンク

天正狂言本

ふすさたう

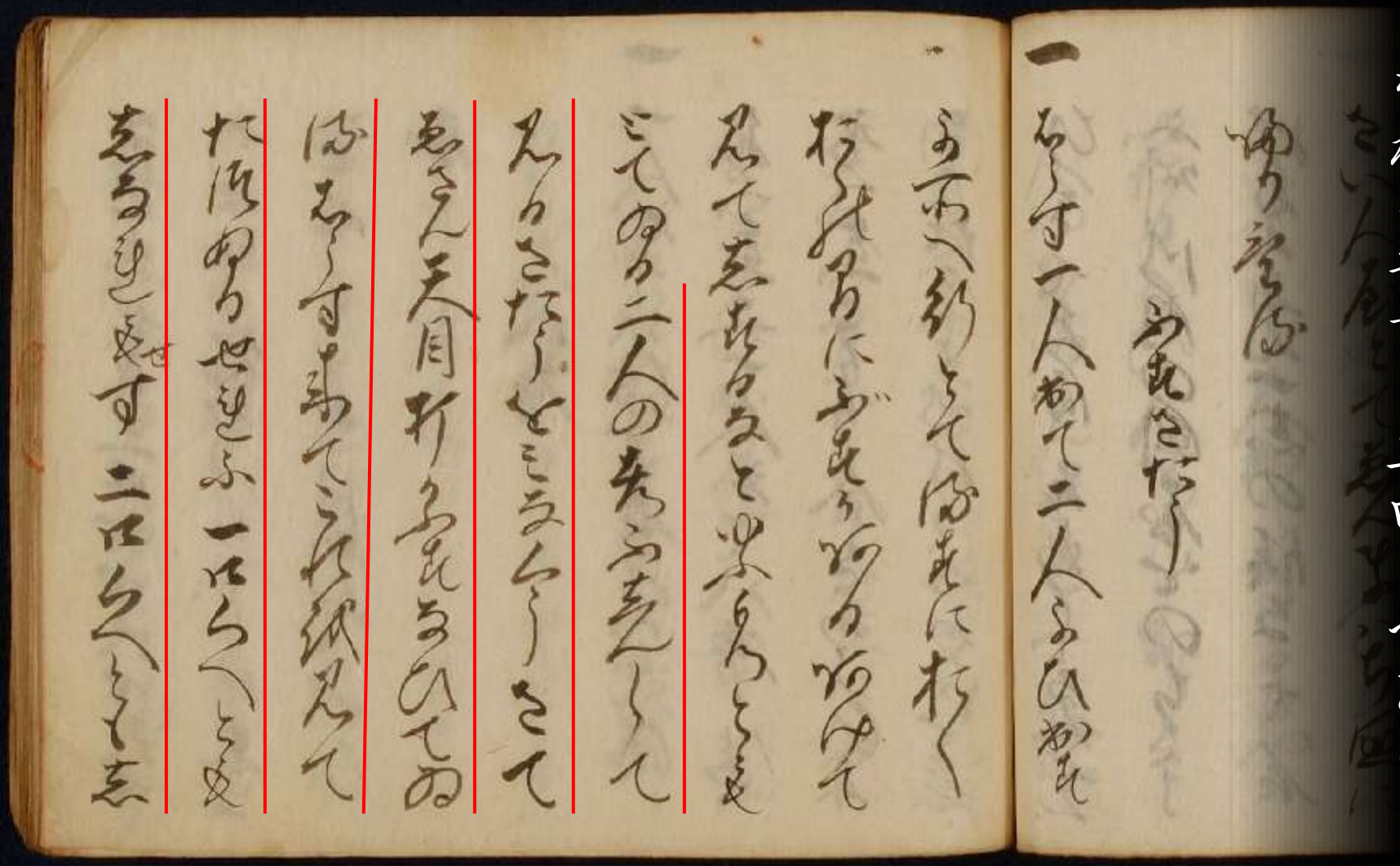
一　はうす一人出て二人よび出す。「よ所へ行」とてるすにおく。「おくのまにぶすがある。あけて見てしするな」とゆふ。「もっとも」とてゐる。



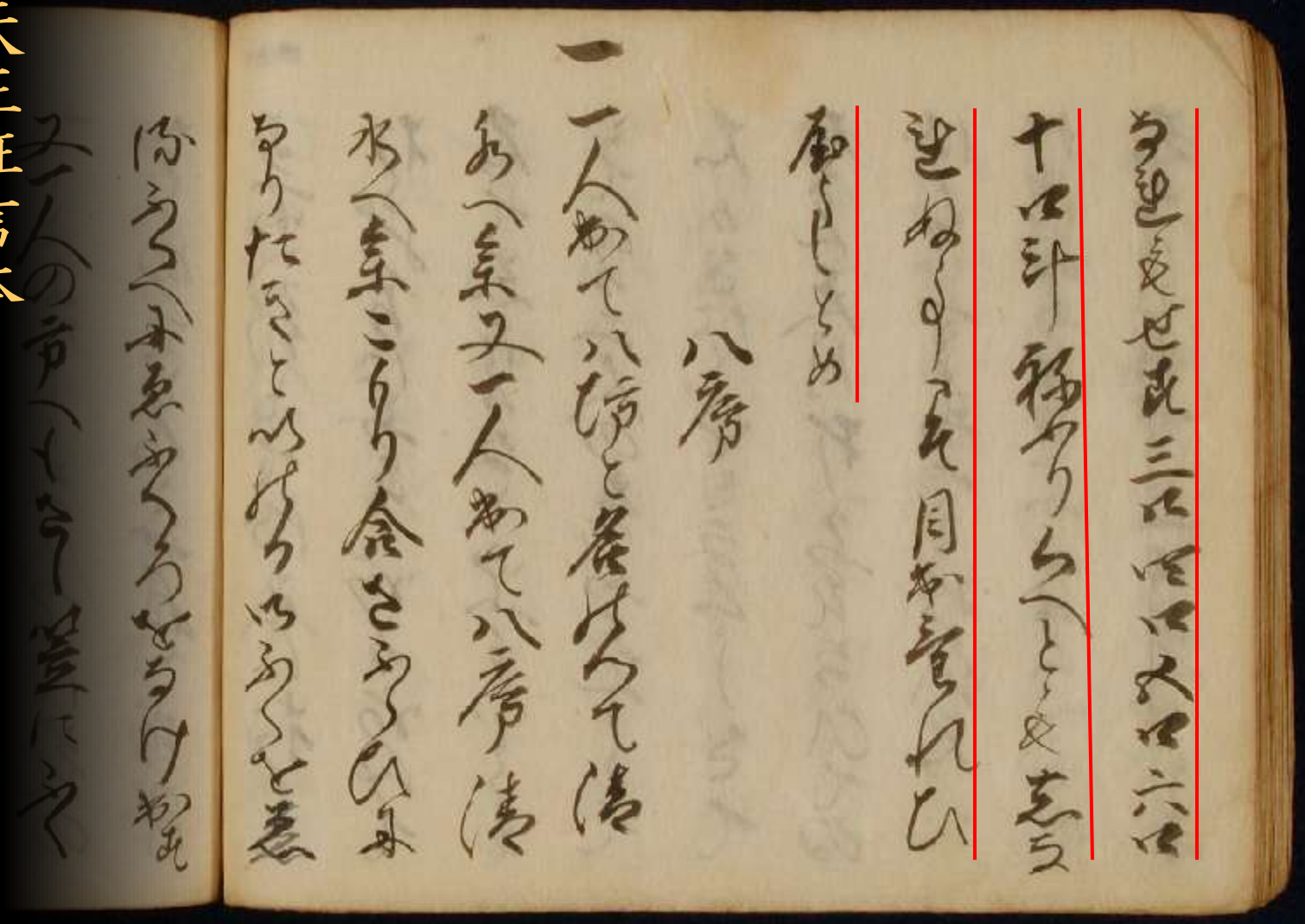
天正狂言本「ふすさたう(附子砂糖)」　(野上記念法政大学能楽研究所蔵)

天正狂言本

……二人の者　ふしんして見る。さたふをみなくう。さてふさん天目打かふす。なひてゐる。はうす来て、これを見てたずぬる。せれふ「一口くへともしなれもせず、二口くへともし



天正狂言本「ふすさたう(附子砂糖)」　(野上記念法政大学能楽研究所蔵)



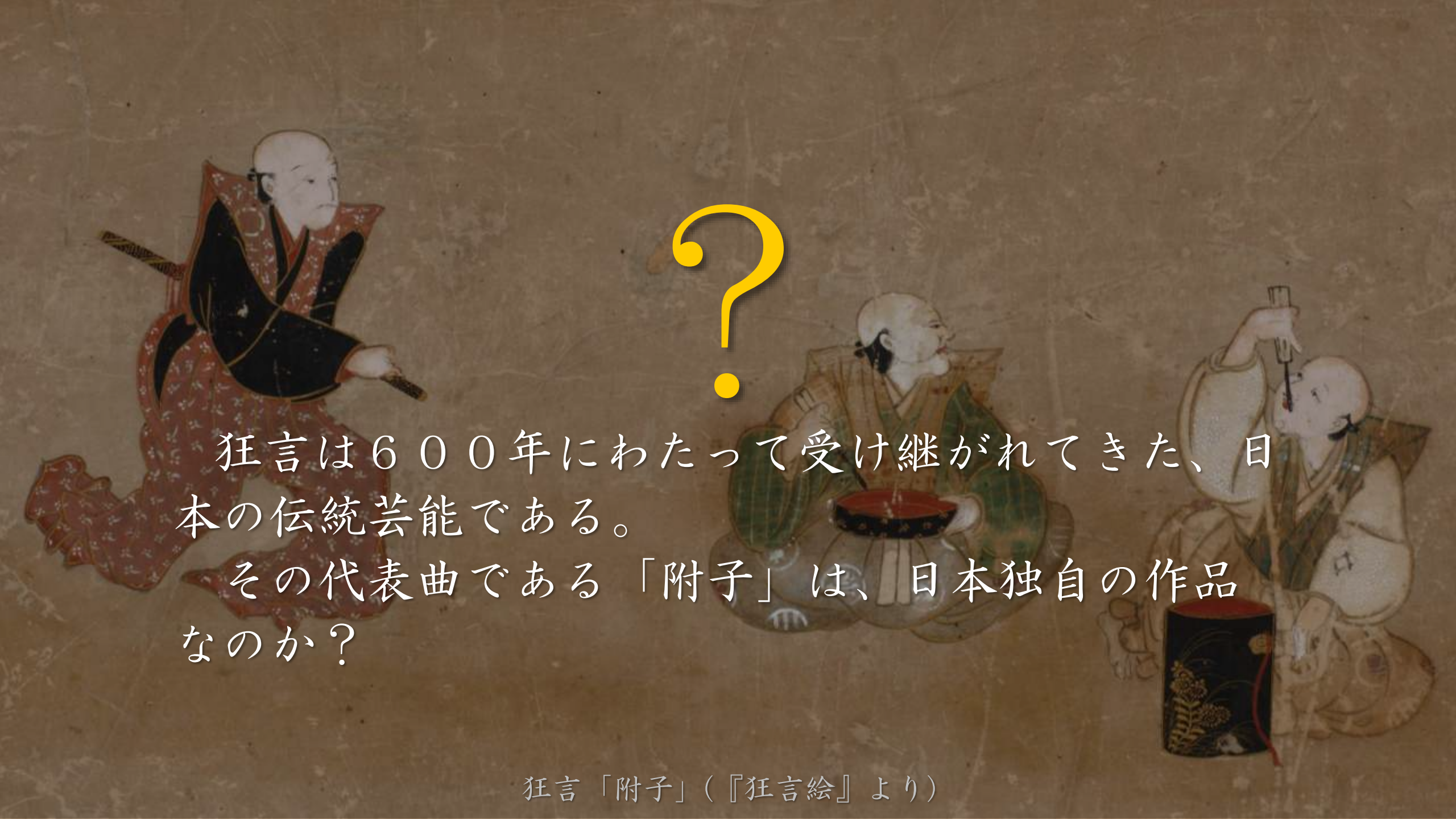
天正狂言本

なれもせず。三口四口五口六口十口とねぶりくへども　死なれぬ事こそ目出けれ」。ひやうしとめ

天正狂言本「ぶすさたう(附子砂糖)」　(野上記念法政大学能楽研究所蔵)

狂言「附子」の歴史

鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』(僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物)の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすさとう（附子砂糖）」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立



？

狂言は６００年にわたって受け継がれてきた、日本の伝統芸能である。

その代表曲である「附子」は、日本独自の作品なのか？

狂言「附子」（『狂言絵』より）

新たな資料の発見

十九世紀の末、シルクロードの仏教石窟（莫高窟第十七窟）で発見された古文書から、狂言「附子」の類話を収めた古写本が見つかった。敦煌写本『啓顔録』である。

敦煌莫高窟第17窟(画面右端)と発見された古文書群

敦煌本啓顔録の発見

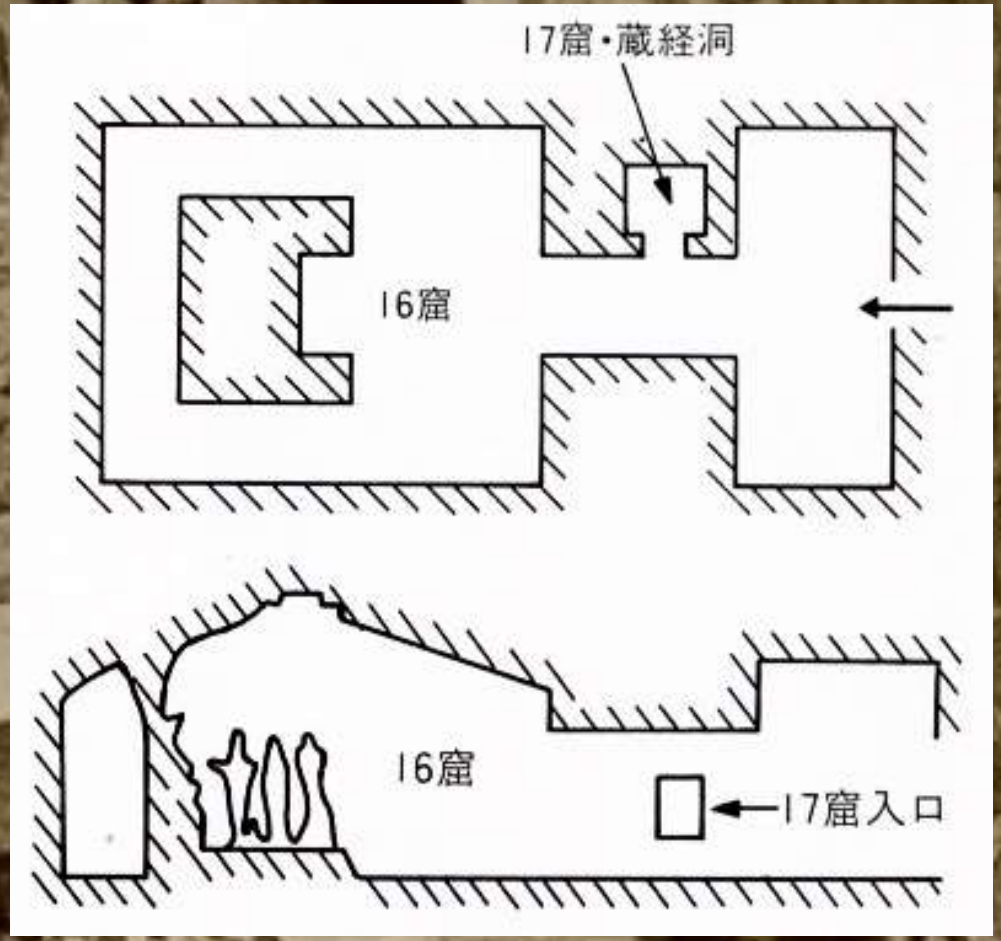
一九〇〇年、シルクロードのオアシス都市・敦煌の近郊の仏教石窟に暮らす王円籙という道士が、そこに小さな隠し部屋(莫高窟第一七窟)があるのを発見した。

十一世紀ごろ封印されたと考えられるこの隠し部屋には、四世紀から十一世紀までの文書数万点が保存されていた。

その中から、狂言「附子」とよく似た物語を持つ『啓顔録』という笑話集の唐代写本(七二三年)が見つかった。

敦煌石窟で大量の古文書が発見される(1900年)
清朝
VIDEO

資料映像：ＮＨＫハイビジョン特集「敦煌莫高窟　美の全貌」より



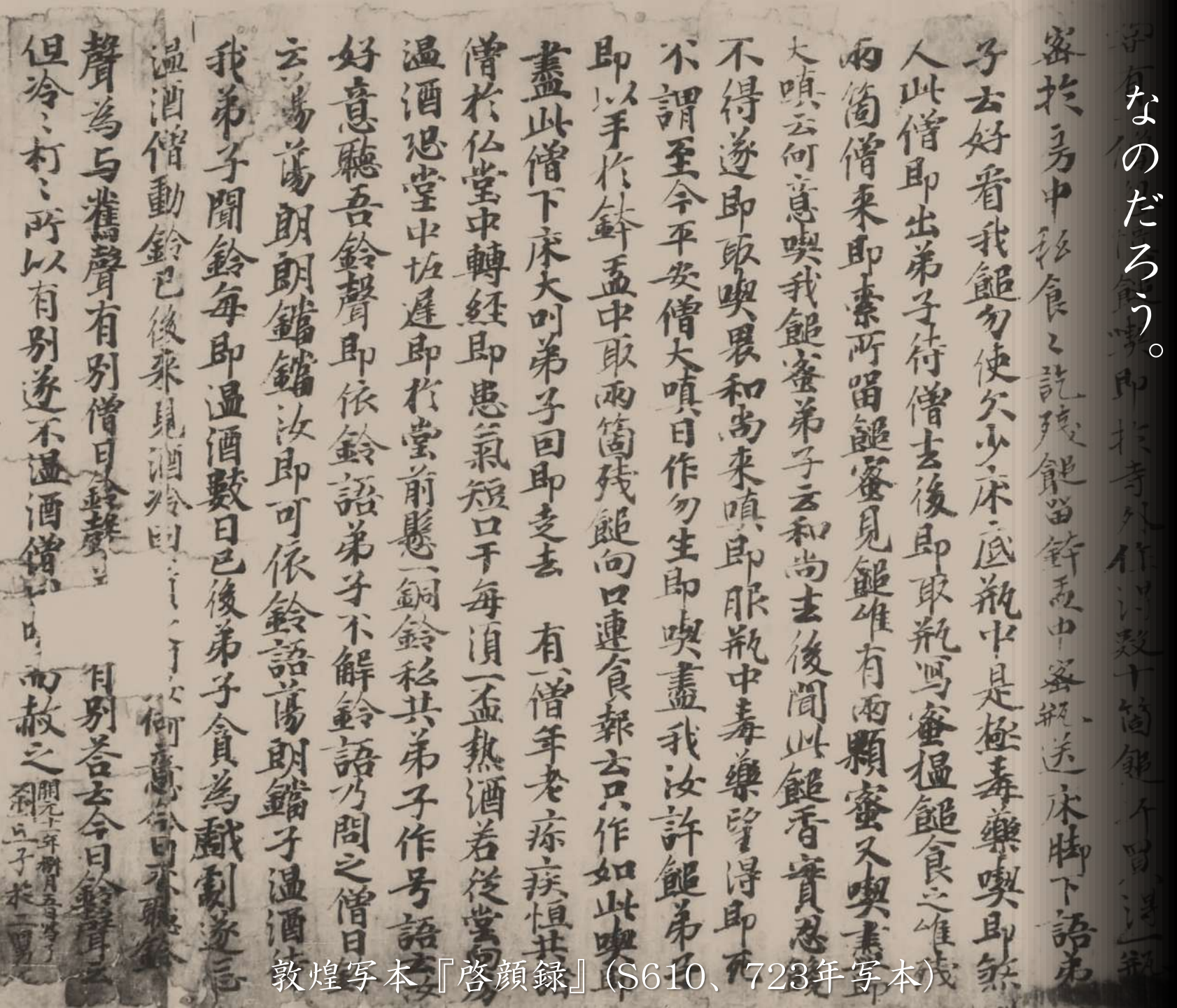
敦煌莫高窟第16窟と第17窟蔵経洞

敦煌莫高窟第16窟と第17窟蔵経洞

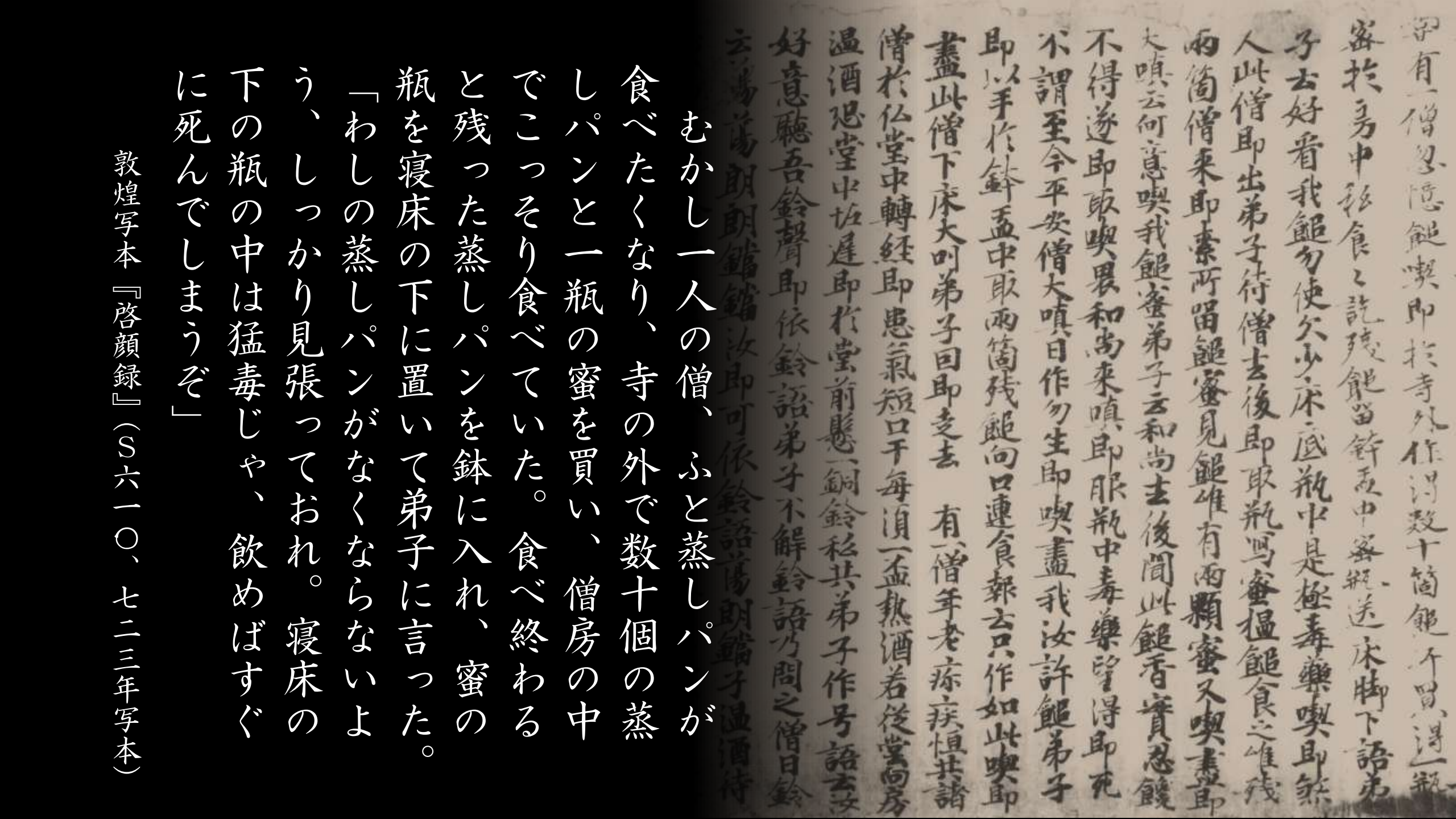
敦煌写本『啓顔録』（S六一〇）

『啓顔録』はその後散逸し、一部の作品が『太平広記』などに転載されているが、敦煌写本『啓顔録』に見られる狂言「附子」の類話は、伝わっていなかった。

では、その内容はどのようなものなのだろう。



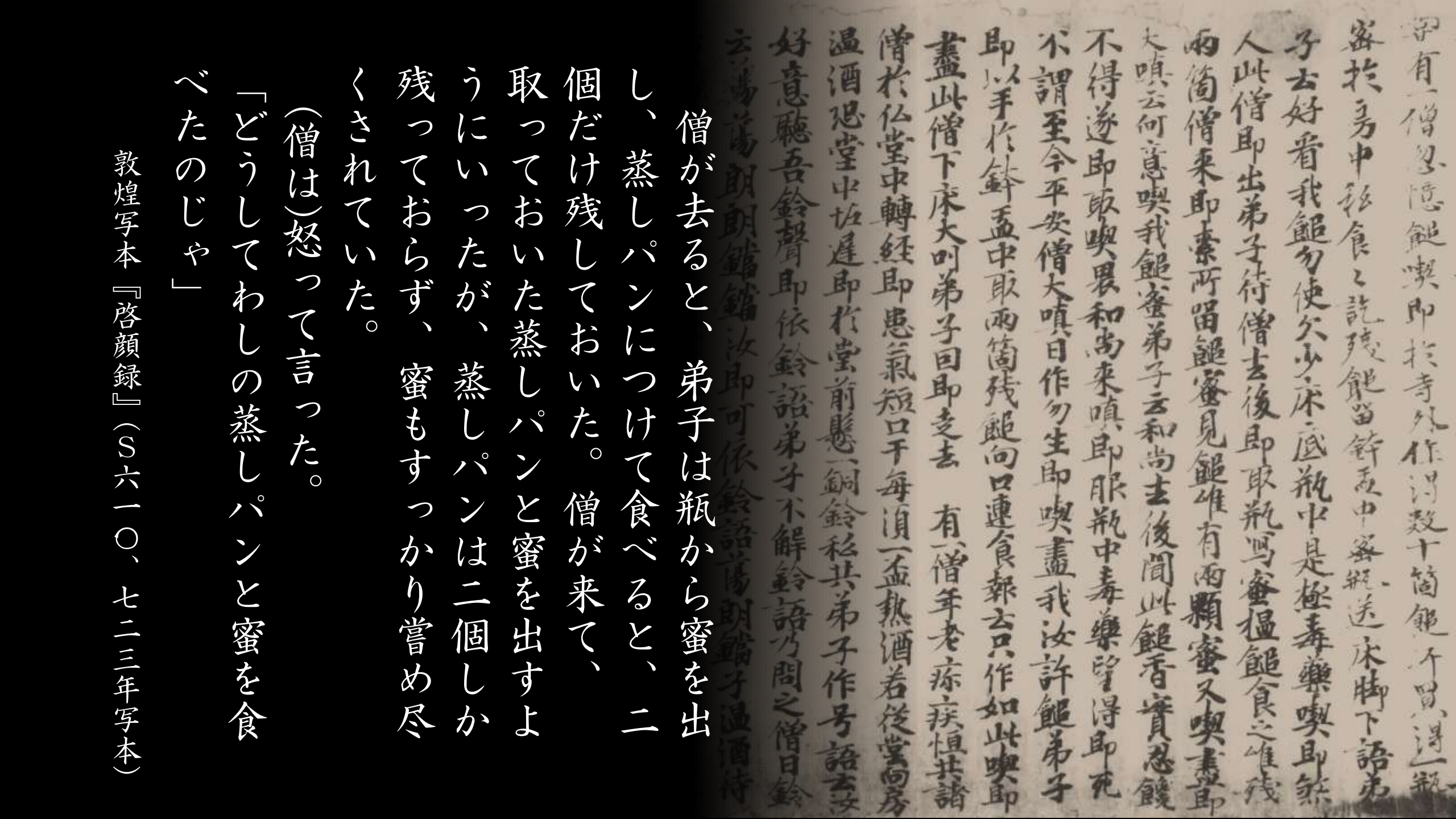
敦煌写本『啓顔録』（S610、723年写本）



むかし一人の僧、ふと蒸しパンが食べたくなり、寺の外で数十個の蒸しパンと一瓶の蜜を買い、僧房の中でこっそり食べていた。食べ終わると残った蒸しパンを鉢に入れ、蜜の瓶を寝床の下に置いて弟子に言った。

「わしの蒸しパンがなくならないよう、しっかり見張っておれ。寝床の下の瓶の中は猛毒じゃ、飲めばすぐに死んでしまうぞ」

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）



僧が去ると、弟子は瓶から蜜を出し、蒸しパンにつけて食べると、二個だけ残しておいた。僧が来て、取っておいた蒸しパンと蜜を出すようにいったが、蒸しパンは二個しか残っておらず、蜜もすっかり嘗め尽くされていた。

(僧は)怒って言った。

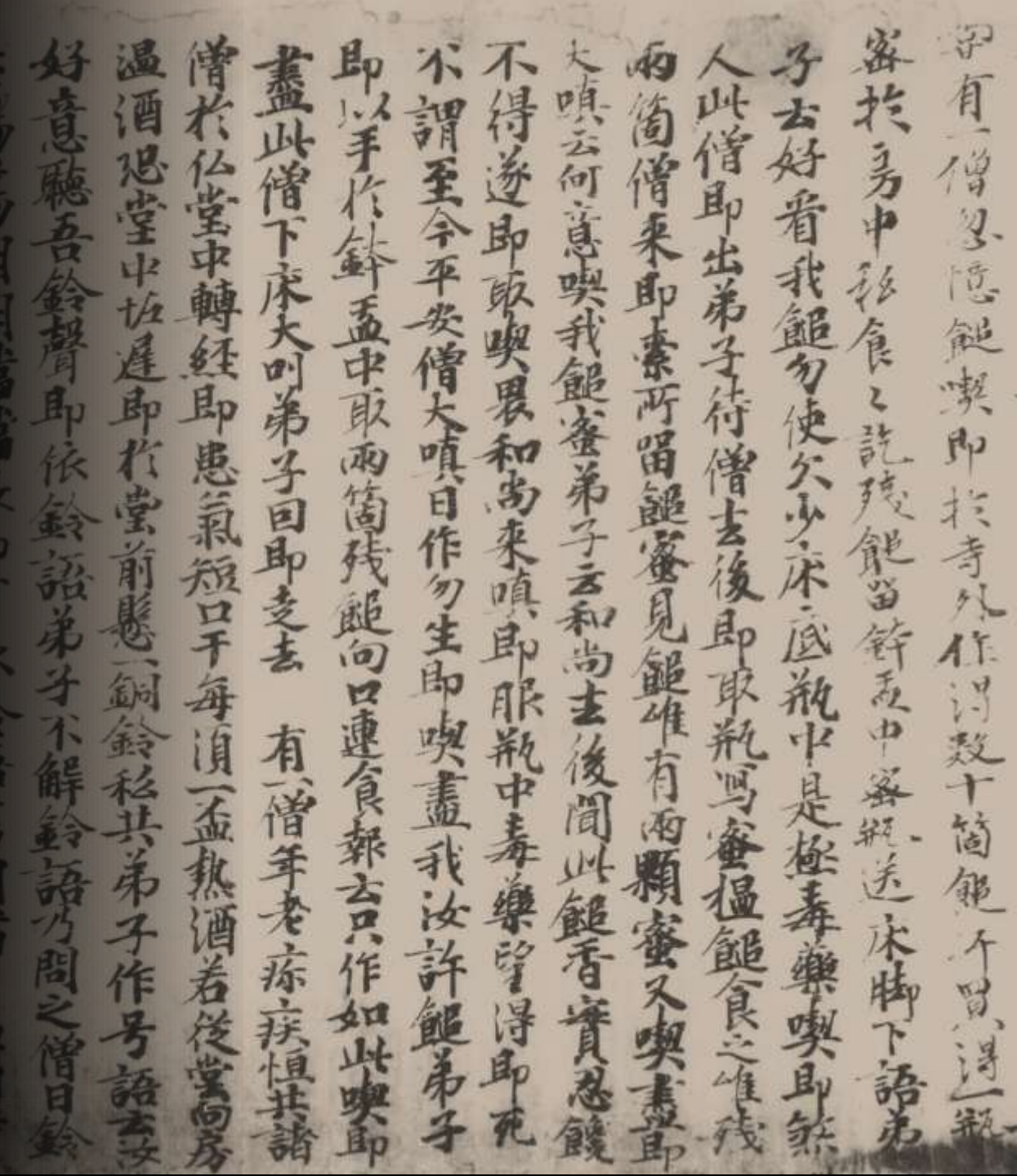
「どうしてわしの蒸しパンと蜜を食べたのじゃ」

敦煌写本『啓顔録』(S六一〇、七二三年写本)

弟子は言った。

「和尚様が去った後、蒸しパンの良い香りがしたので、がまんできずに取って食べてしまいました。しかし和尚様に怒られるのが怖くて、瓶の中の毒薬を飲んで死のうと思ったのですが、不思議なことにいまだに何ともありません。」

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）



僧は怒って言った。

「どうすれば、あんなにたくさんの蒸しパンを平らげられるんじゃ」

すると弟子は鉢の中に残しておいた二個の蒸しパンを手でつかみ、つぎつぎと頬張って言った。

「こうやったんですよ。」

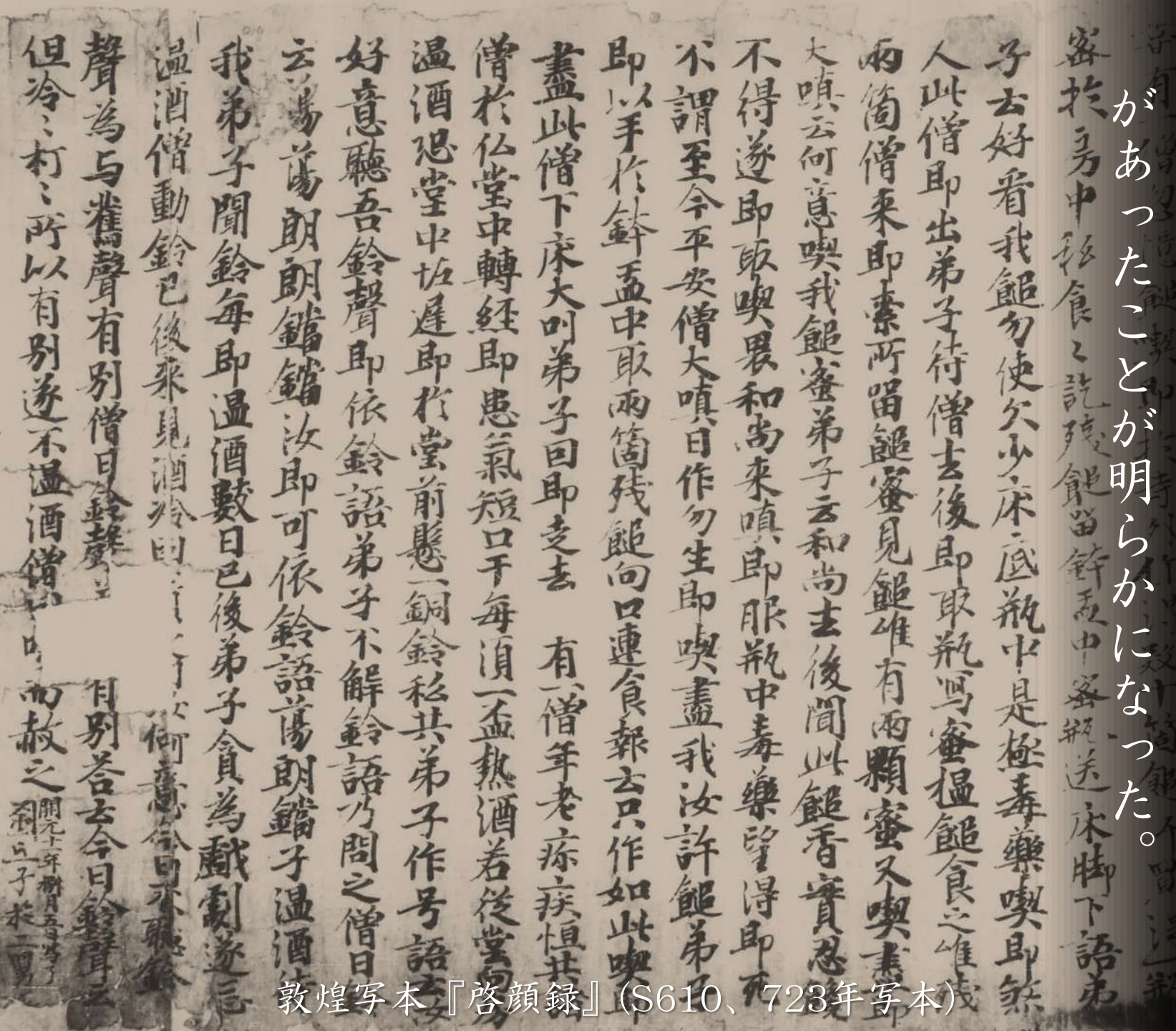
僧が寝床から降りて大声で怒鳴ると、弟子は逃げていってしまった。

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇）

敦煌写本『啓顔録』は、巻末の奥書から唐の開元十一年（七二三年）に書き写されたものであることがわかった。

この古文書の発見により、鎌倉時代の『沙石集』よりも五百年以上も前に、中国に狂言「附子」のルーツがあったことが明らかになった。



敦煌写本『啓顔録』（S610、723年写本）

中国の落語が伝える「附子」

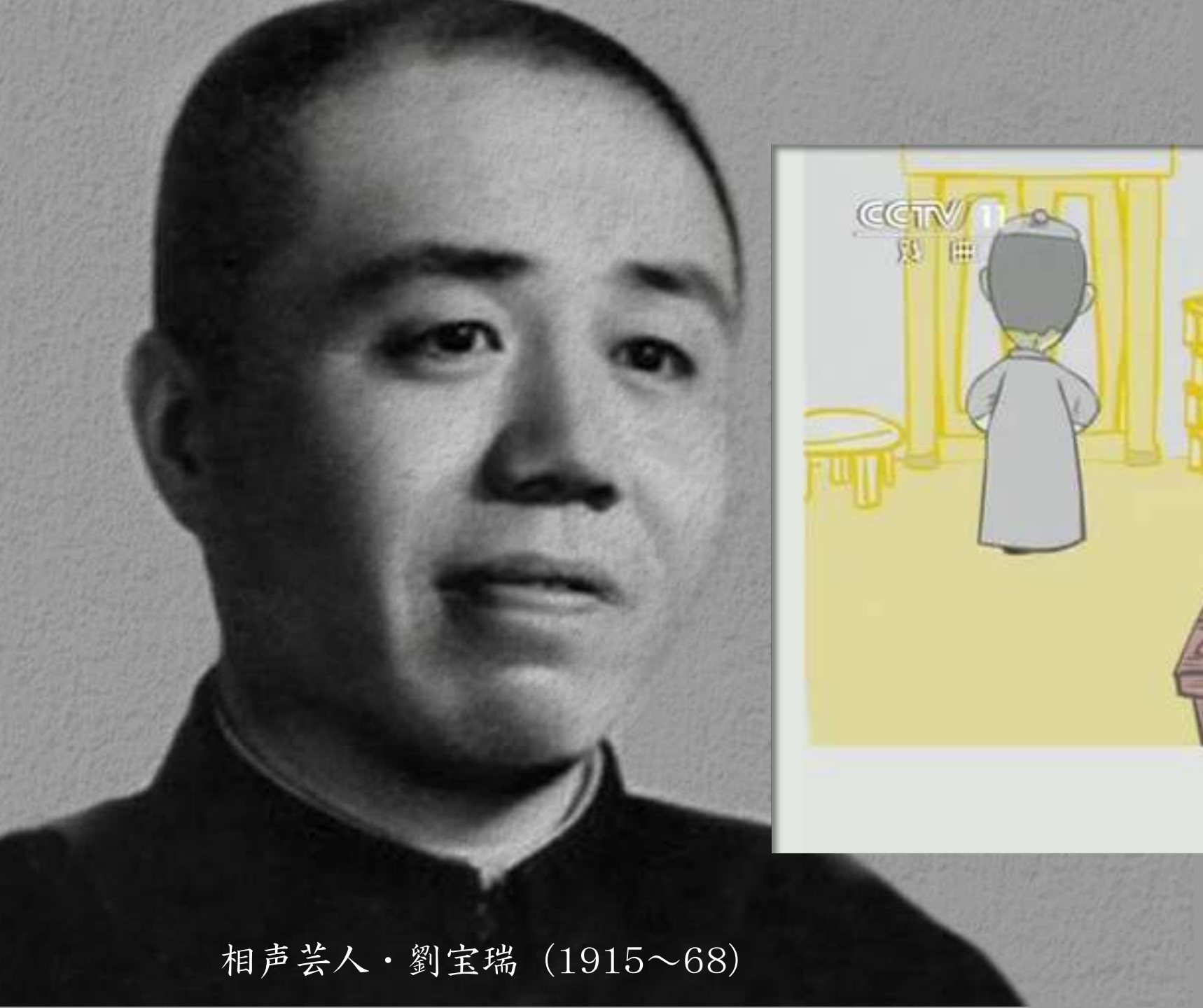
〔解説〕

この話は文献は散逸したものの、民間では脈々と語り継がれていた。その一つに単口相声（中国落語）の『学徒』がある。

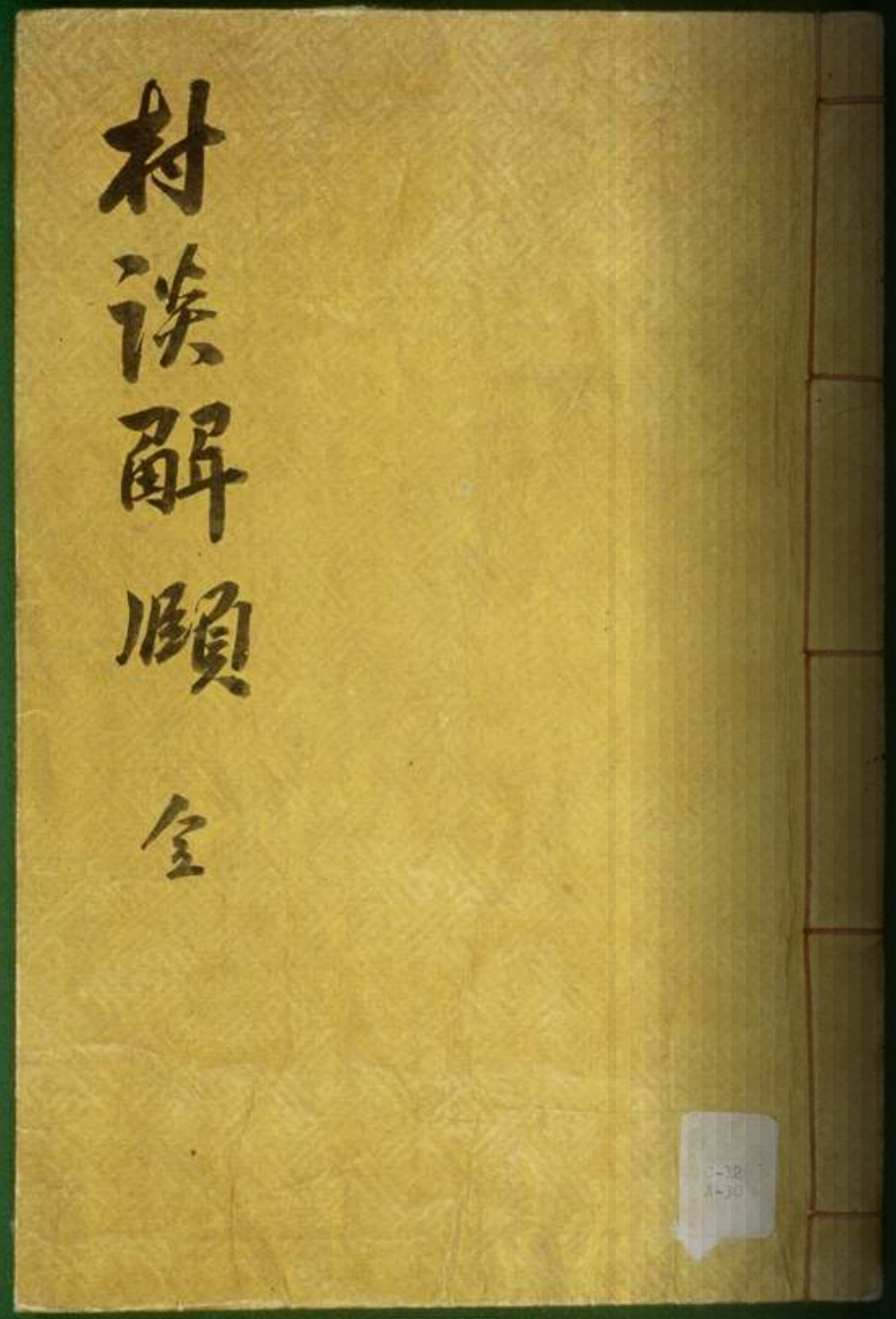
主人公は家具屋の奉公人の「私」。日頃から主人のけちに不満を持っていた「私」は、主人の留守に鶏やハムなどのご馳走を平らげ、主人が毒だといった酒を飲んでしまう。

店に戻った主人にとがめられた「私」は、逆にとんちを働かせて主人をやりこめてしまう。

相声芸人・劉宝瑞（1915～68）



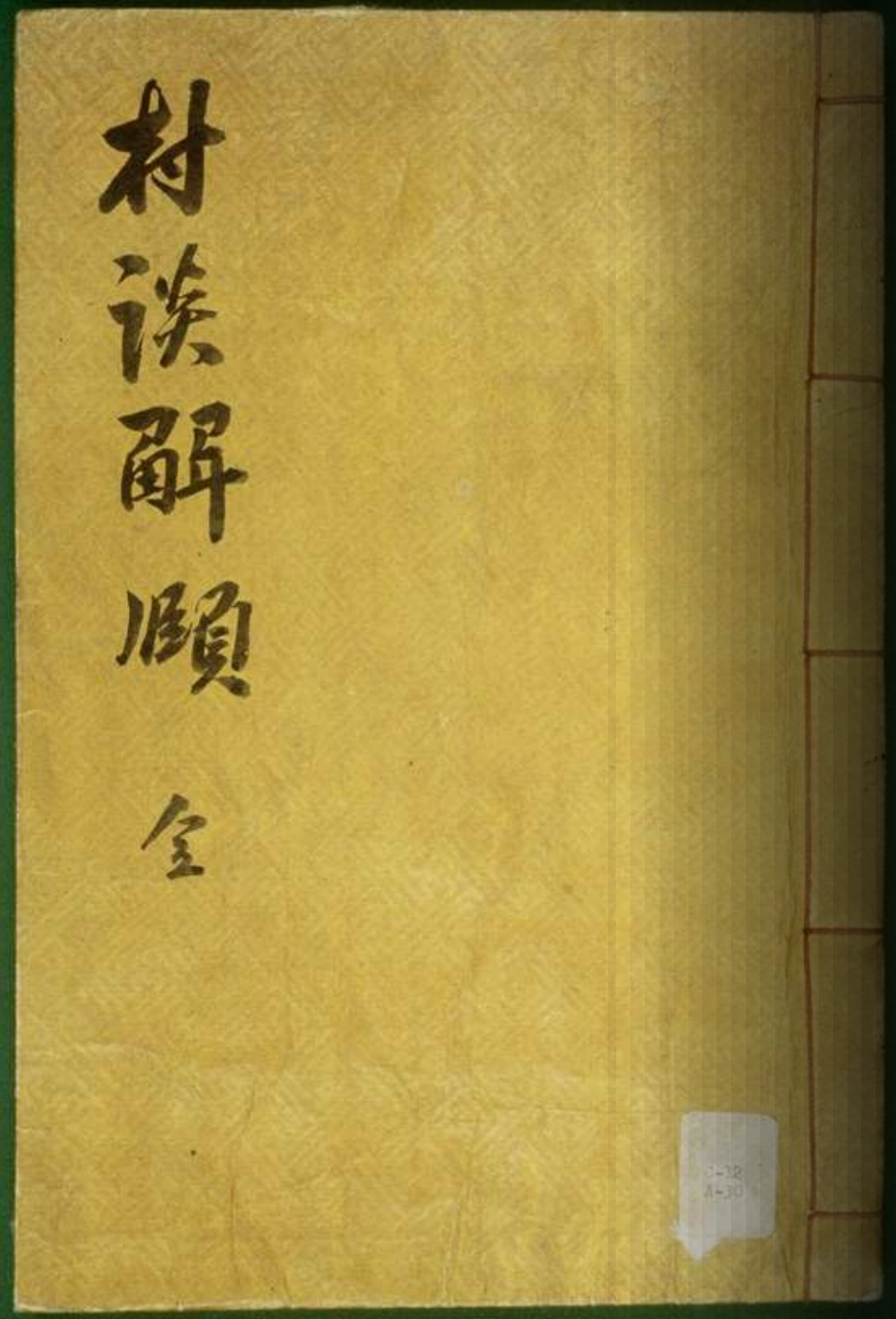
相声芸人・劉宝瑞（1915～68）



朝鮮にも伝わった「附子」

〔解説〕

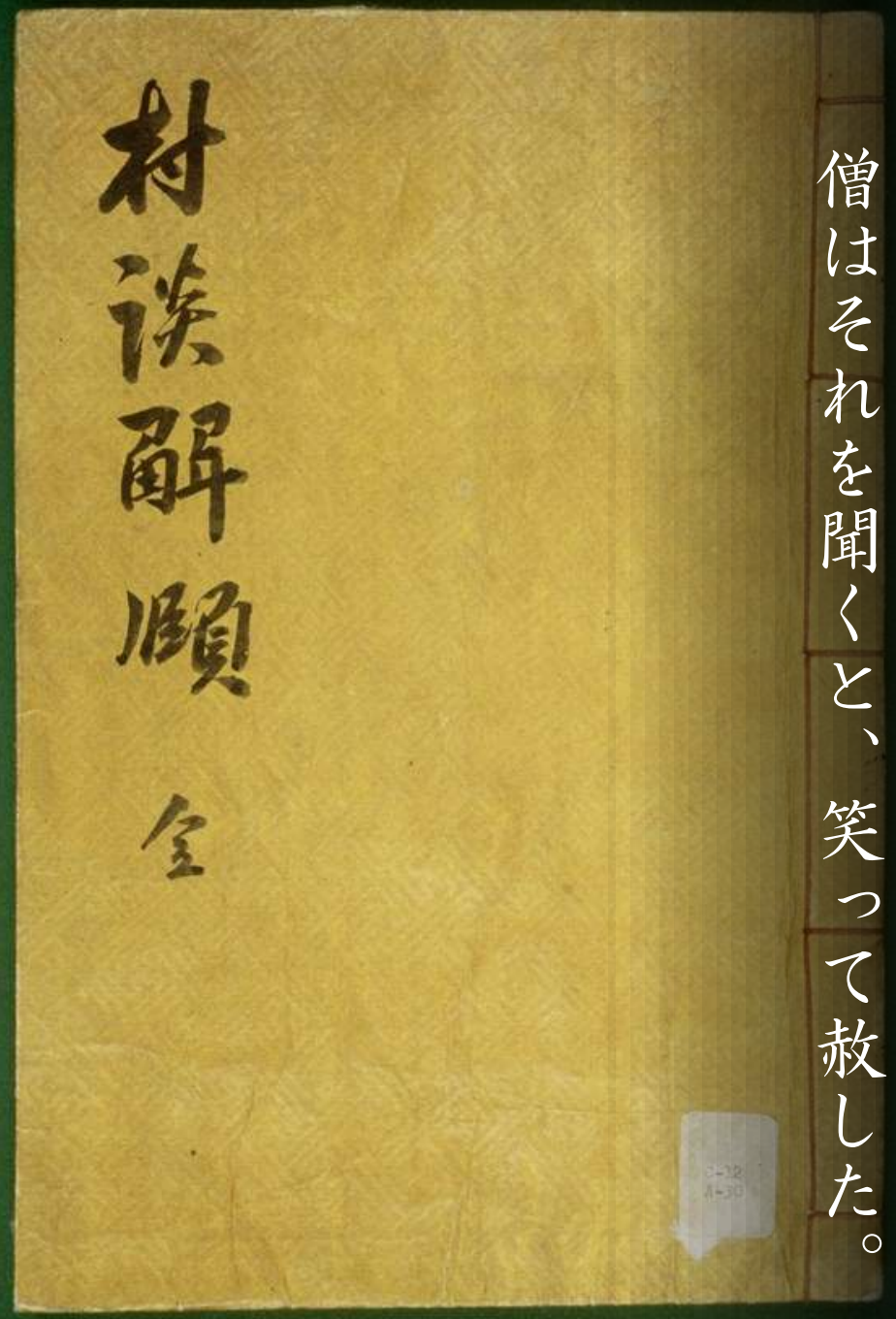
十五世紀ごろ、朝鮮半島でも狂言「附子」の類話が伝えられていた。李氏朝鮮初期の文官・姜希孟（강희맹、一四二四～八三）が編んだ説話集『村談解頤』に、次のような話が見られる。



（朝鮮）姜希孟『村談解頤』

庭の柿が熟したので、僧はこれを摘むと籠の中に入れ、梁の上に置いて、喉が渇くたびにこれを啜っていた。小僧が「それは何か」とたずねると、僧は「これは毒の果物じゃ。子供が食えば、舌が爛れて死ぬぞ」と言った。

用事で外出することになり、小僧に僧房の見張りをさせた。すると小僧は竹竿で梁の上の籠を下ろし、食べたいだけ柿を食べると、茶臼で蜜の瓶を打ち割った。



（朝鮮）姜希孟『村談解頤』

小僧は柿の木に登り、僧が帰るのを待った。僧が帰ると、部屋には蜜が満ち、柿の籠が落ちている。僧は怒り、杖で柿の木を叩き、「早く降りて来い！」といった。

小僧は、「私が鈍かったために、誤って茶臼で蜜瓶を割ってしまいました。怖くなって死のうとしたのですが、首をくくるにも縄がなく、首を斬るにも刃物がありません。そこで籠に入った毒の果物をすべて食べたのですが、どうしても死ねず、木の上に登って死ぬのを待っていました」

僧はそれを聞くと、笑って赦した。

なぜアジアの伝統芸能を学ぶのか？

日本はアジアとの交流の中で独自の文化を築き上げてきた。このため、日本文化の特色を理解し、世界の人々に伝えるためには、まず何がアジアに共通のもので、何が日本独自のものなのかを正しく理解する必要がある。

この講義では、アジアの庶民文化に大きな影響を与えた中国の民間伝承（四大民間故事）と、それを伝えた伝統芸能（戯曲・曲芸）の世界を学ぶとともに、日本との類似点や相違点について考えていきたい。